

# 「相手の話をよく聞く。 すべてはそこからだ」

東京建築カレッジに半生を捧げた構造設計者

関 昌孝 さん



2階の「事務室・教務室」には関先生の自席がありました。

2023年(令和5年)3月19日 第1版

職業能力開発短期大学校 東京建築カレッジ  
教務運営委員会

東京建築カレッジの草創期から、学校の発展に尽力し、2016年度まで教務運営委員を務めてこられた、関 昌孝 先生(一級建築士、構造設計)が2022年(令和4年)3月19日、お亡くなりになりました。

1946年(昭和21年)12月8日生まれ、享年76歳でした。昨年4月27日の教務運営委員会では、関先生のカレッジへの多大な貢献から追悼文集の作成を決定、ゆかりの方々や先生方、卒業生等に追悼文の寄稿を呼び掛けました。

一周忌にあたり、皆様からいただいた追悼文を公開し、故人を偲びたいと思います。



「日本民家園」での特別授業後、小田急線向ヶ丘遊園駅前の  
居酒屋で(2014年7月6日)  
撮影:関 昌彦

# 父、関 昌孝と私

東京建築カレッジ 教務運営委員  
(構造系 科目担当)

第2期生 関 昌彦

父と私の関係は今に思えば大きくいくつかに分かれていたように思えます。出来の悪かった私は16歳を迎える頃には家から叩き出され、放浪生活をしていました。数年後、先に不安を感じて戻ると「自分で決めた道だ、これからもしっかりと頑張っていけよ」の一言。これはまずいと思いきや抜いて決めたのが跡継ぎになる事でした。それも簡単には許されず何をすべきか考え、働いてお金を貯めて



第26期生を指導中の関昌彦講師

建築の専門学校へ行き、卒業した後に何度もお願いに行き、やっと許されましたが、仕事はもちろん出来ずにいると「一から勉強をし直せ」と東京建築カレッジへの入学を勧められました。当時、父も講師を務めていて、一級建築士の受験資格も得られると思いきや入学を決意したのがカレッジとの出会いでした。

私がカレッジを卒業するとそれまで以上に父はカレッジとの関わりを深くしていきました。それは本当にすごいものでした。ある日の朝、事務所の所員を集めて「もう俺の目の黒いうちはコンクリートはやらない」と言いだし、3か月仕事がなく無収入の時もありました。この頃には父との考え方の違いなどが山積していましたが、仕事の他にも何かに向かい合う時の責任と情熱のようなものを教えてもらったように感じます。

結婚をして子供が生まれた頃に建築に行き詰まり、父に「建築を諦めて、もう一つの夢である蕎麦屋になりたい」と言ったことがありました。父は「お前は蕎麦屋を馬鹿にしているのか。設計も出来

ないのに蕎麦屋にならなれるとでも思っているのか。蕎麦屋に失礼だろ」と。ここでお話しするのも躊躇(ちゅうちょ)するくらい恥ずかしい思いをしました。この出来事から自分の中で何かが変わった気がしました。

一級建築士を取得すると、私は父である所長に「一級建築士を取ったのだから給料を上げてくれ」と言いました。父は「資格を取っても仕事は出来ないよ。やっとスタートラインに立てて良かったな。これからが本当の勉強だよ」、「計算屋になるな、設計屋になれ」と応じ、やっと仕事を教えてもらえるようになりました。月日は流れて、ある日、「構造」をカレッジで教えてみないかと言われ、講師としてカレッジに関わることになりました。はじめは父の補助としてサポートをしていましたが、難しく自分に足りないものが多いことに気づきました。色々と試行錯誤していく中で、あれだけ批判していた父の事が分かってきたように感じて、今では講師活動が私の生活の一部となって常に頭の中にカレッジが存在しています。仕事として出来ていてもそれを伝える事は難しく、父には内緒で学校にも通いました。

晩年はやっと私の考えていた「親子」になれたような気がしています。お酒が好きで体調を崩し入院することもしばしばで心配は尽きませんでした。穏やかで、優しい父がそこには居ました。入院後はコロナ禍も重なり面会もままならず大変でした。

父は亡くなりましたが、最近よく考えることがあります。父は私に何を教えたかったのだろうか。それはきっと「人としてどのように生きていくか」を自分で考える事、「人や社会との関わり方を身につける」と言うことだと思います。

そのようなことが父の誠実な人への思いや仕事に表れている気がします。父を越す事は難しいかもしれませんが、自分なりに少しでも近づけるように仕事をして、微力ながらカレッジを支えていけたらと思います。

# 関 昌孝さんの歩み

一級建築士 大臣登録番号 173507 号

1946 年(昭和 21 年)12 月 8 日生まれ

1965 年(昭和 40 年) 3 月 宮崎県立小林工業高等学校 建築科 卒業

1965 年(昭和 40 年) 4 月 (株)弥生建設工業 入社

1972 年(昭和 47 年) 9 月 (株)弥生建設工業 退社

1972 年(昭和 47 年)10 月 (株)広瀬建築設計事務所 入社

1986 年(昭和 61 年)12 月 (株)広瀬建築設計事務所 退所

1987 年(昭和 62 年) 1 月 個人事業として建築構造設計事務所立ち上げ

1992 年(平成 4 年) 6 月 (有)Σ(シグマ)設計室 設立



教室で 2014 年 6 月 20 日

「押し付けるのではなく、力学とはどういうものか、周りに転がっている事例で話をし、相手の話をよく聞く、それが一番大事であると・・・」

(関昌孝先生)。 カレッジ名物の実習棟を使った「構造実験」授業も

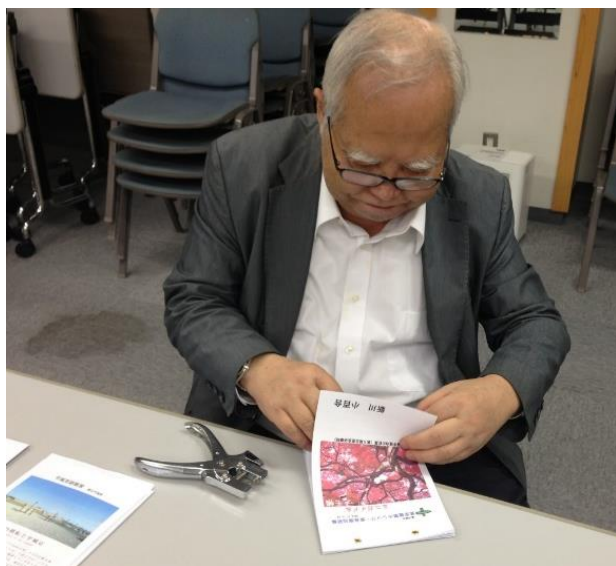
関先生が中心になって考案しました。

# 構造設計者として、教育者として・・・在りし日の関先生



↑池袋校舎2階「事務室・教務室」  
で。奥に見えるのは渡辺顕治さん

2014年度のカレッジ祭  
2015年3月8日  
(江東実習場)  
名物の玉こんにゃく作り  
を18期生に指導中の  
関先生(右写真)



2015年度 2016年2月21日  
19期生の「卒業制作発表会」で講評↓



↑19期生の「奈良宿泊研修」向けに  
フィールドメモ帳を作成中

# 目 次

- ・ 巻頭言…父、関 昌孝と私（関 昌彦）
- ・ 関 昌孝さんの歩み
- ・ 構造設計者として、教育者として…在りし日の関先生

## 東京建築カレッジの黎明期をともに過ごした仲間から

- ・8p 関先生のアーカイブスとレガシー（藤澤 好一）
- ・11p 会いたいね（橋本 英夫）
- ・14p 対話の学習こそ真実の学習の道～関さんを偲ぶ～（渡辺 顕治）
- ・16p 『技術教室』No.690 2010年1月号 連載「青年期と職業訓練」人格と技能の開発(9)から（渡辺 顕治）
- ・21p 夕陽の名残を左側の頬に受けて（松森 陽一）

## 先生方と卒業生たち

- ・24p 自分の話をじっくり聞いて よく考えてから返事をしてくれた（片岡 茂樹）
- ・25p 自分でやってみなさい！（長野 智雄）
- ・26p 関 昌孝さんの実像（宮坂 公啓）
- ・26p 温かく包みこむ包容力（金田 正夫）
- ・27p カレッジ生の心をとらえる教育的交友術に敬服（老田 靖雄）
- ・29p 印象的だった最初の授業（第3期生 佐藤 安紀子）
- ・29p 「あうる」によく行きましたね。（第5期生 藤枝 奈緒 旧姓 山川）
- ・30p 仕事での貴重な話に学びました（第11期生 林 優一）

## 東京土建技術研修センターとカレッジの事務局から

- ・31p 渋谷支部常任役員からカレッジへ（梅澤 仁）
- ・31p カレッジ生への観察力、包容力（不破 幸司）
- ・32p たたきあげの構造設計者（年森 隆広）
- ・33p ゲソの買い出しでアメ横へ（大橋 清次）
- ・33p 愛情を感じる関先生の写真（森田 美也子）
- ・34p 関先生のこと（近藤 初雄）

## 東京土建渋谷支部の仲間から

- ・35p 私の出身地、山形から「玉こんにゃく」（佐藤 カヅコ）

## 追悼

# 関先生のアーカイブスとレガシー

東京建築カレッジ 初代学校長 藤澤 好一

関先生といえば目に浮かぶのが太っ腹とカメラ、そしてお酒。私が学校長を退任して、久しぶりにお会いした時はすっかり痩せられ、お酒も控えておられたから、限られた期間の関先生のイメージを綴ることになる。

まずは見た目の太っ腹、私がお付き合いをした東京建築カレッジの創設から15年ほどは増加傾向にあった。時おり、すれ違ったときなど「また、大きくなったのと違いますかあ」、と挨拶代りに触れさせてもらったこともあった。その頃、カレッジの帰りに時おり立ち寄ったのが平和通り駅寄りの居酒屋「花見茶屋・あうる」(=左下写真)。



## 「花見茶屋・あうる」の常連

店内は夜桜見物の雰囲気、なぜか東京建築カレッジの文字が入った提灯も下がっていた。壁には常連客のランキングを示す木札が下がっていて、トップを競っていたのが関先生と当時の事務局長・松森さんだった。お二人ともこのお店がお気に入りだったらしく、単独での立ち寄りも少なくなかったようだ。どちらかといえば、独りで呑むのを愉しんでおられたようだが、木札のランキングの上昇とお腹の膨らみは比例関係にあったに違いない。

ときどき、ご一緒させていただいたが、どこでもお酒を愉しむというスタイルは同じだった。ご出身が薩摩ということで(現在の宮崎県の一部も江戸時代の薩摩藩領内=編集者注)、池袋の本格薩摩焼酎のお店へお誘いし、伝統酒器「黒じよか」で前割りしたものを「癪」で飲んだことがある。薩摩芋焼酎のもっとも美味しい飲み方ということだ





ったが、お酒の楽しみ方はさまざまで、その時の状況に合わせて選ぶべし、というのが関先生の主義主張だった。そんなやりとりがあったことが懐かしく思い出される。

カレッジ祭での名物「玉こんにゃく」は、関先生が材料の調達から下拵え、味付けから販売まで、一手に引き受けておられた。肝は味付けに欠かせないというイカの軟骨(キ〇〇マ?)。これをどこからか大量に仕入れてこられ、味付けに使った後は、玉こんにゃくと選り分け、これを肴に飲むお酒を楽しみにしておられた。

## 膨大な記録を残したカメラ

凡事徹底、何でもないようなことをどこまでも突き詰め、誰も真似できないレベルまで高める、そんな取り組みであったように思う。

その最たるものがカメラ。カレッジの折々が膨大な記録として遺された。入学式から卒業式までの諸行事はもちろん、研修や見学、実習、演習、授業など、様々な場面に登場された。あの太っ腹の上には首から下げた愛用のカメラがあり、シャッターチャンスを逃さなかった。大切な集合写真では、持参の三脚をセットし、構図を指示された上で、セルフタイマーでご自分も加わる場面も少なくなかった。こうして撮影された写真は、学内に展示され、カレッジニュースなどの誌面構成でも欠かせないものだった。集合写真などはプリントをしてそれぞれに配布されてもいた。それらが今も私の手元に数多く残されている。

当時、それをいただいたとき、「ご負担をおかけしていませんか」との問いかけに、「いやーあ、材料費は請求していますから」と泰然しておられた。プロの写真家ではないのだから、それでもよかったのかもしれない。しかし、材料費以外のコストは、撮影から整理、プリント、保存にいたるまで半端ではなかった。それを平然と続けておられたのは、見かけではない本来の意味での太っ腹だったと思うのです。そうした鷹揚で、物事に動じないという姿勢に、改めて敬意を表し、感謝を申し上げます。そして、お詫びしなければならないのは、写真そのものの価値に鈍感だったことです。

いま改めて、手元にある『池袋北口職人大学』(彰国社、2003年6月)を開くと、随所に散りばめられている写真は、ほとんどが関先生撮影のものです。カレッジ生をとらえたショットもカットも巧みで優れており、プロ並みですが、それら写真に関してのクレジット・「撮影・関昌孝」の表記は全くありません。この刊行物は、東京建築カレッジ創設・初期の貴重な記録ですが、その中であって写真が訴える情報力を再認識した次第です。ここで改めて、クレジットの明示とともに、そのパワーとエネルギーに敬意と謝意を表します。遺された貴重で膨大な情報・記録は、東京建築カレッジのアーカイ

ブの基盤でもあり、レガシーともいえるものです。

関先生のご功績は、担当された「建築構造」、「木構造設計」を判りやすく理解させることに情熱を注がれたことにあります。しかし、それを超えるのが、とりまく状況、体制などに目を向け、それらを情報として記録し、保存につなげられたアーカイブスです。

アーカイブとは、組織や個人の活動の中で作成される文書であり、単に収集・保存するのではなく、ある体系に基づいて編纂し、目的があって保存された文書の集合体であるとされていますが、関先生の写真の数々は文書を超える情報であり、まさに「東京建築カレッジ」としてのアーカイブスの礎となるものです。そのご功績をこの機会に再評価するとともに、貴重な遺産として継続発展につなげていただきたいと思います。



「東京建築カレッジ 第2回 技能文化祭」 1999年10月24日

当日の反省交流会で発言する関 昌孝先生

左は、松森 陽一さん

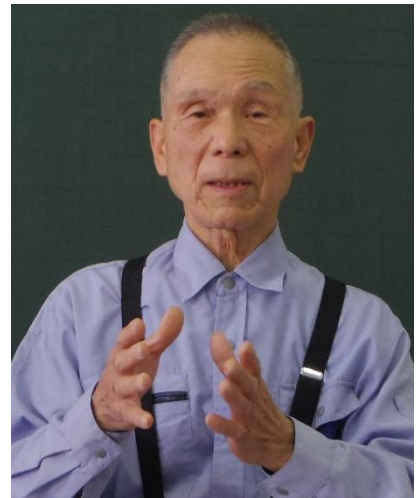
## 追悼

# 会いたいね

東京建築カレッジ 教務運営委員 橋本 英夫

人との出会いは、不思議と突然にやってくるもので、私と関先生の出会いもまさに突然、何の前触れもなく実現しました。

東京建築カレッジが開校して間もない頃、東京土建本部の技術対策関係の会議が箱根のあるホテルで開催されました。休憩時間、いつもは人で込み合っていたロビーに、私と関先生の二人だけとなり互いに引き寄せられるかのように、「武蔵野支部の橋本です」、「渋谷支部の関です」と自己紹介が始まりました。次に出た言葉は「大工です」、「鍛冶(かじ)屋です」でした。鉄筋コンクリート造や鉄骨造の構造設計をされる人と聞き、構造設計をや



っている人が自分のことを「鍛冶屋です」と言えるのは、現場を十分に理解しているからであり、なかなか他人に対して言えることではありません。東京建築カレッジの開校以来、自分の紹介で、「今、私はこれをやっています」と言える人が少ない中で、実に明解な話を聞きました。「この人をカレッジの先生にお願いしたい」。瞬間に感じ、「今すぐにでも研修生たちに引き合わせたい」、「理論と実践を研修生たちの心に浸み込ませられるのは、この人以外にいない。この人をカレッジへ呼んで生きた理論と役に立つ構造設計を指導してもらおう」と、その日のうちに佐藤洋介事務局長に報告し、「渋谷支部の関さんという構造設計の先生がいらっしゃいます。『カレッジの講師としてぜひお願いしてほしい』と伝え、関先生も応じてくださいました。しかし、関先生にしてみれば、なんで自分が東京建築カレッジに呼ばれたのか、皆目見当がつかなかったと思います(このことについてはその後1年くらいしてから私から関先生に説明しました)。その頃の関先生は木造建築の構造についての実践的な経験が少なく、「木造についての勉強をやりたい」との申し出がありました。木造についての勉強会が、渡辺顕治教務部長を交えてスタートし、その勉強会は毎週金曜土曜の夜間、近くの居酒屋「あうる」で行われました。

## 開校2年目後半、カリキュラム検討会

カレッジのカリキュラムについての検討が、開校して2年目の後半頃から教務委員会(ママ)で話題となり始め、研修生たちからの意見や希望を取り入れながら、木造建築の実技実習を軸に据えて、それと各学科の関連付けを重点に考えるカリキュラムづくりの検討が始まりました。より実践的に座学と実技の学習を組み立てるやり方がこれからの職業訓練には必要である、という思いから、従来の職業訓練校のカリキュラムを参考にしてきたカリキュラムから、本校ならではの特色のあるカリキュラムへの発展が行われました。関先生の力が発揮されたと思います。

その後も、「実習棟」の実習を経験しながら、5期生を迎える頃に現在のカリキュラムの骨格が藤澤好一学校長が中心となり定着することとなりました。その頃の関先生はもはや「鍛冶屋」ではなく、木構造の構造設計の専門家になられていた、と言って過言ではなく、先生の木造に対する情熱は、大工の私から見ても、とても信頼のおけるものでした。

「木造の強さをもっと実験してみたい」、「木造の建物を壊してみたい」。そうした先生の思いは、「実習棟」実習から「実習棟」を使った建築構造実験に進化していくことになりました。筋交いの強さが胴差しを押し上げて折ったり、筋交いの強さが引き抜きを強くし、柱脚部分の柄(つか)を柱根からもぎ取ったりする様子が研修生たちにとっては生きた教材でした。大黒柱構法を使い二階床の剛性を高め、差し鴨居と足固めを使って柱に曲げ応力を持たせた実験で、「実習棟」へ過去最大の荷重をかけても「実習棟」の変形量が少なく、逆に反力体の鉄骨が変形してしまったのを見た先生が、「『実習棟』をこれ以上強くするのは実験としてつまらない。やめよう」の関先生の言葉に、思わずにんまりしたことを忘れていません。木造をより粘り強くすることに関しては、いささか自信もありましたが、このことを機に、木造建築の粘り強さと、本来の木造のあるべき姿を再確認できたのも関先生のおかげでした。木構造の経験と理論の両方について勉強させていただきました。

## 関先生の人生を変えてしまった建築カレッジ

その頃の関先生の木造建築に対しての入れ込みは、先生の人生の目的、目標を変えてしまったのかもしれませんが。先生に対して、先生の周りの関係者の方に対しても、私との出会いがなければ何も変わらなかっただろうに・・・と。申し訳ないことをしてしまったかな?とったりもします。しかし、それにもまして、先生の研修生たちへの思いは、大変大きく、広く、深いものであったことはだれの目にも明らかでした。研修生たちにとって関先生との出会いは、それぞれのこれからの人生に

大きく関わってくることでしょ。居酒屋での熱の入った話を聞きながら、先生と研修生たちとのやり取りが今でも目に浮かびます。「あうる」での勉強会？の中でカレッジの教育理念についても当然のことながら常に話題にありました。カレッジ開校後に埼玉県での「ものづくり大学」は私たちにとっても関心事でした。ものづくりへの情熱は当然負けないものがありますが、教育の在り方として、大切な目的と目標を具体的には「人づくり」であり「人を育てる」ことを第一にしたい、このことから、「当校は『ものづくりの大学校』であると同時に『人づくり』を前面に出していこう」で意気投合。「池袋の北口に人づくりの職人大学あり！」を知らせていくべき、とし、「あうる」の店内に「池袋北口人づくり大学」と記した提灯をぶら下げてもらうことになりました。以来、「あうる」の店内には「東京建築カレッジ人づくり大学」の提灯が店じまいするまでかけてあったのを記憶しています。

関先生という大きな存在は失いましたが、私にはお別れした悲しみを超えて、20数年間の無限の喜びと楽しさの広がり、私の生きがいになっています。あとどれくらい頑張ろうか、もう頑張るのをやめようか……。相談できる人はもういない……。会いたいね……。また夜が更けてのを忘れるくらい飲んで語らいを……。無理を承知で願う。合掌。



1999年10月24日  
カレッジ祭 シンポジウムで発言する  
橋本 英夫先生  
その手前は、関 昌孝先生



追悼

# 対話の学習こそ真実の学習の道

## ～関さんを偲ぶ～

東京建築カレッジ 初代教務部長 渡辺 顕治

関さんが病に倒れたということを知り、何度かお見舞いしたいと連絡をとりました。「今は会えない」「懸命なりハビリ中」——元気な関さんの復活を信じその時を待ちました。「関さん逝く！」の報に無念の思いを禁じえません。



### 関さんは東京土建の技対部委員だった

ひるがえってみれば、私と関さんの出会いは、忘れもしないカレッジ一期生の後半期からです。常駐の教務職員としてカレッジのカリキュラム編成のとりまとめは私の仕事でした。一期生の山場の授業に構造系の「建築構造実験」がありました。「渋谷支部に関昌孝あり」「第一線の独立自営の鉄骨・木造の構造設計家」「彼こそふさわしい」の声が出て、組合の技術対策部委員をしていた、関さんに会いに行きました。会議の休憩中会場のロビーでお会いした。これがはじめてでした。眼光鋭く、少々どもる。西郷さんばりの体型。一も二もなく講師をお受けいただきました

第一回の授業に先立って部厚い「建築構造実験」教材資料集が届けられました。資料集一冊一冊に27人の研修生一人一人の名前が打ち込まれていました。しかし、その資料集は幻に。関さんが下した判断は「構造実験」以前の学習に問題あり、でした。とりわけ構造力学が身につけていない。一体カレッジはどういう出発をしてきたのか。実際授業が成り立たない状況が進んでいました。座席についても学習に参加していない。ただ書き写すだけ。あるいは、学ばないことを学習しているだけ。カリキュラム崩壊の手前でした。

## 対話重視の授業スタイル

関さんの授業は一方的な講義から 180 度転換。対話の授業としてはじまりました。なぜ君はここにいるのか？結局のところ何を、なぜ学びたいのか。資格のため？どんな力をつけたいのか？どうしてか？夜勤で突っ伏して寝ている研修生にも目を向ける。一人一人に声をかけていく。学ぶことの意味と責任を常に意識する問いに対して借り物の言葉ではなく、自分の言葉で説明することが求められました。あるいは対話を言葉にすることであったかも知れません。そのように思考を働かせること、回答(対話)できるようになることが勉強だと考えておられたふしがあります。

資格をもって仕事する以上、ミスにしてもそれがなぜおきたのか説明することが出来なくてはならない。資格をもつということはそういうことだ。責任を負うということだ。そのための学習だ。責任が負えないならば仕事してはならない。学習は、厳しい仕事の倫理を支えるものでもあったのです。むしろ一体だ。関さんの持論でした。

関さんのカレッジ講師として教務運営委員として取り組みは多岐に及びます。「建築構造実験を実習棟に即して実施する構造実験」の企画は関さんのカレッジでの大仕事になりました。伝統的建築技能と構造の構造力学的検証はカレッジのオリジナルなカリキュラムのひとつです。学習観、資格に関する考え方は、関さん自身の構造設計家へとあゆんだ道にも裏づけをもってカレッジで追求された中心なものの一つであったと思います。

《2年間の学習のしめくりであるとともに研修生の生き方の表現》ともいわれる卒業制作のゼミ指導、さらに研修旅行ほか行事への参加と記録。これにもまたすべてにかかわったとっていいほどの打ち込みであったと思います。関さんは、いわば構造設計家の視点からカレッジの全体に常にかかわりまた見ていたのです。そういう講師であり教務委員であり、カレッジ運営の同志でした。

彼の飾らない人柄にたくさんの研修生が共感し、目を覚まさせられた。建築のプロとして学ぶ意味と責任を考えさせられた。なにより学ぶ意欲をかりたてられたと思います。

もっと早くから関さんと一緒に構造力学を学びたかった。この実感は一人の一期生の声にとどまるものではなかったのではないか。カレッジは関さんの人生の一部となりました。カレッジへのかかわりは無常のよろこびの源でもあったと思います。今、息子さんがカレッジの構造系の講師をひきうけられています。関さんは彼に研修生の生活をみろ！との言葉を残したとのことです。関さんのこころざしが息子さんにも継がれていること、そして、たくさんの息子娘がいることはうらやましく、また誇らしく思います。

## 戦争と平和の問題を授業で語り合った

ウクライナ戦争の現実を見せつけられるにつけ「建築は器ではない。平和だ」と議論した9期生の構造力学の授業を思い出します。戦争は建築物にとどまらず人間存在の破壊です。建築は戦争の真反対です。関さんの構造の学習は結局平和の追究であったのではないかと。戦争は美しい。美しいものは構造力学的に誤っている。利権に歪められている。職人はそれに与さない。人間の優しさ、ぬくもり、平和こそ建築だ。根本的に美しい。建築の学習はそれに資すること、その力を身につけること。それにそむき、また無力である学習は学習ではない。関さんの生んだ対話の学習こそ真実の学習の道ではないかと思われてきます。

関さん、ありがとうございました。やすらかにお眠りください。

『技術教室』 No.690 2010年1月号

連載「青年期と職業訓練」 人格と技能の開発（9）

# 関さんのこと

青年期教育研究家 渡辺 顕治

## カレッジの教育実践

構造系の締めくくりの科目は「建築構造設計製図」だった。1期の最終ラウンドである。当初の計画では、「木造、鉄骨造および鉄筋コンクリート造に必要とされる各種構造設計関係図面の基本について模写を通じて理解し、読み取れる能力を養う」とされた。担当は「構造設計」の先生。1年間の経緯の中で木造を中心にしよう、また、「図面かき」の指導は実務に長けた方がいいとの判断が出た。新たな先生探しが必要だった。S支部の産業技術対策委員に人がいる。関さんという。構造



設計事務所の方だ。事務局長の提案だった。会議の休憩時、ロビーでお会いした。まなざしが陰しく、中背だが骨格は大柄。一も二もなく、お引き受けいただいた。分厚い教材資料が送られてきた。表紙には研修生一人ひとりの名前があった。授業の開始は1998年1月からだった。

今年(2009年)、東京で「教育のつどい」が行われた※。関昌孝さんは「技術職業教育」の分科会にカレッジの事務局長(渡邊輝明さん)と卒業生(9期 山本国男さん)とともに「カレッジの教育実践」をレポートした。

「この11年間で一言で振り返れば東京建築カレッジが私の授業を容認したことだと思います。11年前の1月、1期生の授業でカレッジ生活が始まりました。不思議と緊張感はなく、ただ、『図面のかき方、読み方を教えればよい』と言う軽い気持ちで緊張感のないスタートだったと記憶しています。職業柄、2年間、彼らが力学・構造をどのように学び修得したか質問したところ、何も学習していないことに愕然としました。迷った末、『思うところで授業してください』とのカレッジの意向をいただき、私の力学・構造設計が始まりました」と記す。

※「みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい～教育研究全国集会2009」(2009年8月21～23日、全日本教職員組合＝全教などで構成する実行委員会主催)の第9分科会「技術・職業教育」

## 関さんのこと

1期生にとって関さんとの出会いは救いとなった。少々詳しく関さんを紹介しておきたい。関さんは1946年、宮崎の生まれ。父母は戦前、満州で働く。父は山形の出。母は宮崎の出の職業婦人(看護師)だった。関さんは長男。職業高校・建築科に学ぶ。当時の構造力学のノートは今も持つ。勉強家だった。卒業して上京。鉄骨業者に就職する。現場の荒くれ職人の世話が見習修行の最初だった。会社から推され、鉄骨業の高度の技術水準に対応する構造設計の長期セミナーに応募、受験する。日本鋼管が傘下業者のレベルアップのために組織したものである。全国146社から合格者10人。関さんはその1人となった。3カ月の合宿訓練。しかし、周りはみな大学出、高校出は関さんのみだった。しかし、講師が偉かった。関さんに合わせて講習をすすめてくれた。そこで構造設計の基本技術を習得する。一つの転機となった。5年後、設計事務所に移った。意匠設計を希望した。しかし、手薄だった構造設計事務所に出向、構造設計家への道を歩むことになる。気心があつた方と組んで事務所を開く。東京オリンピックの後、列島改造政策もあり、仕事はたくさんあつた。20年近く働く。独立はバブル期と重なる。コンピュータに投資した。1000万円を超えるローンを組

む。最先端の構造計算のプログラムを入れ、仕事に生かした。月々何十万円の支払いをした。経済情勢の浮き沈みの中でいろいろな転機があった。ある時点から鉄筋コンクリートの構造設計をやめている。コンピュータで計算すると強度(接合部)の検証などデータを読み切れない。分からないことが多い。ごまかしはできないと考えた。同じ難しさでも木造建築の設計に関心を高める。カレッジとのご縁は、一層その方向を強めた。しかし、木造は素人、研修生から学ぶとの立場である。

プライベートなことになるが、事務所時代、渋谷・参宮のあるスナックのママさんに見込まれる。その女性は戦前、海外(ドイツ)で大使館勤め、大使館付きの看護師だった。戦後、店を開く。ハイカラで地域の評判になった。関さんは出入りする有力なお客の一人であったに違いない。独り者を通じたママから、結婚相手の紹介と夫婦養子の縁組みの申し込みを受けた。ママは宮崎の実家にまで飛んで関さんの両親を説得した。渾身のものだった。幼少期、少年期は足の具合が悪く、運動は制限された。同年の子どもたちは飛び回っている。それを見ているしかなかった。父は田畑を売って治療に賭けた。関さんの弱者に対する共感力の強さは、自分自身の「弱者」だった時の経験と切り離せないだろう。同時に「弱者」の「わがまま」と不正義に対し厳しい。それは仕事の中でも、また、付き合いの中でも関さんのものである。しかし、関さんはただ厳しいのではない。十人十色を認める。そこに柔軟性がある。優しさである。息子さんは、関さんがカレッジの講師をはじめると相前後して、カレッジの2期生として入学した。親の後をめざす。

## 仕事に対し自分の言葉で説明できる

カレッジから任されて仕事を始めてみて、関さんが、最初に思ったことは研修生の人数だった。「28名。この人数なら1対1になれる」。次に思ったことは、「彼らは構造設計を修得するためにカレッジに来ているのではない。彼らは働いて自分の生活をして、妻子を養っているごく普通の建設職人である」ということである。つまり、関さんにおいて、研修生は、学習者という前に生活者であり、働いて喰って行く職人・社会人だ、と認識された。その点で関さんは少々の先輩ではあれ、職人同士という共通の立場に立たれた。先生風を吹かしているかに見える時でも視線は常にそこにあった。設計家にありがちな設計的観念の配下としてしか職人を見ない立場とは違う。同時に、その関係にとどまらないで、なぜ学習をしなければならないのか、なぜ力学を学び、構造設計を学ぶのか、学習者としての必然性、学習の必要性を明確にされた。「一生に一度わが家を造る。その人にとっては一大事であり、将来があり、夢がある。そこで、造り手は、施主に造り手の意思が分かるようにし説

明する責任がある」。「そこで私の授業はただ力学ができることではなく、理論的に裏打ちされた仕事に対し自分の言葉で説明したり、また、書面で説明できる。そのことを学習する」のである。

力学や構造設計の学習の意味を仕事についての説明責任と結びつけて明示した。ビス打ちのピッチひとつ、その幅をとることが理論的(力学的)に正当である根拠、耐力的にみて安心安全である理由が説明できなくてはならない。そういう説明ができる(責任を果たす)には、仕事そのものについての学習とともにその力学的根拠(理論)についての学習が必要である。関さんは責任ある仕事、仕事する資格を常に問う。「資格を持つこと」と「仕事ができる」ということは同等ではない。しかし、資格を持つことで仕事において責任が問われる。社会に対する責任だ。知らなかったでは済まされない。責任とは問いに対し応答ができるということである。仕事ができても、説明(応答)ができなくては理解されない。したがって信頼されない。力学・構造設計にせよ、仕事の説明手段として使えるようになることは仕事の自覚化のステップである。それは学習の過程に他ならない。

関さんはテストでも口頭試問を重視する。解答用紙を返却するときに時間をかけて解答に至った経緯の説明を求める。説明の仕方によって点数の増減を行う。なぜか。「彼らは社会人であり、仕事をして賃金を得て生活しているのである。何となく仕事をして毎日を過ごすのではなく、自分の仕事に責任を持ち、仕事に誇りをもてる職業人として社会に貢献して欲しい。建築界をリードする人材に育てて欲しい。その観点から、自らの出した回答に対して責任を持って欲しい」。説明責任はテストの取り組みにも貫くのである。これは、関さんの学習観の基本であった。卒業するには何としてもつかんでもらわなくてはならない課題でもあった。

## 「眠るきっかけを与えない」

椅子に座り、机に向かう。そのことを苦手とする研修生は多い。どうすれば授業に参加してくれるのか。関さんはいまだに苦慮している。1期以来のものである。関さんは授業の中で、一人ひとりとやりとりする。交際がある。常に質問をする。対応を求める。それについて他の者の評価を待つ。こうしたやりとりをして、みんなの前で話をさせ、それを評価する。たんに、「眠るきっかけを与えない」以上の意図が込められる。「建築の仕事で自由な発想力が貴重であると言われる。発想力は体験に裏打ちされている部分が多いと考える。仲間の前に立ち、自分の意見を発表する機会を多く設け、みんなに聞いてもらうことで、『自分は何をしたいのか』『しているのか』、自らの発想を説明する

力が養われてくる」。「確かに、建設職人は仕事はできるが、仕事の内容を説明するのが苦手な者が多い。今まではこれで済んでいた。しかし、これからは違う。自由な発想力(柔軟性)こそが、今からの建設職人を支え、地位向上に役立つと考える」。関さんの確信である。

ここに提起されるのは、11年間の関さんの「教育実践」上の立場と考え方的一端である。1期生の時は未分化なものであったかも知れない。しかし、構造力学や建築構造設計など建築の学習で最も専門性が問われる学習において、学ばないことを学んでしまったり、学習を自らの建築の仕事と無縁であるだけでなくむしろ対立物と見る経験を固定してしまう危機に関さんは回避してくれた。関さんという人物との出会いは、学ぶこと、人とつながることへの信頼を意識させてくれたのである。川上和人君は卒業後10年目の OJT 発表会で語った。「関さんと出会って構造のスタートがわかった。説明があった。最初から関さんに会ったら構造計算が好きになったかもしれない。今からでも2年間、関先生の構造設計を勉強したい」。それは彼一人の感想ではなかった。



2004年5月21～22日 第9期生「飯能・秩父研修」

## 追悼

# 夕陽の名残を左側の頬に受けて

元 東京建築カレッジ事務局長 松森 陽一

池袋平和通り商店街をカレッジに戻ってくる関先生の姿、もう沈んでしまった夕陽の名残を左側の頬に受けて立ち止まった…私の記憶の中から消えないシーン。「どうしました」と聞くと、いつもの優しさあふれる関スマイル。照れているようでもある。忘れ物ではない。察するに、卒業制作に取り組んでいる研修生(生徒)への何か思い出した「一言」、助言のために戻る様子。こちらもニコリする。研修生は、今日をのがしたら次の週になってしまう。何度か聞いた関先生の教える側としての「真剣勝負」の立ち位置。このシーンを思い出すと清々しい気持ちが再現される。



## 居酒屋アウルの常連番付表「東西の横綱」

30分間くらいして、居酒屋アウル(注:店内の番付表では、関さんと私が東西の横綱。ちなみに私の結婚祝う会はここ)の二人の定位置、カウンター席の隣で再会するが、研修生に何を話すために戻られたかは聞かずじまいとなった。聞いても話さないのが関さんの流儀。まして、少しでも相手の負になることなら、優しさあふれるスマイルを武器に、口を開けてもらうことはできない。関さん、頑固な一面があったが、これは、頑固とは違う。関さんの信念、身についた生き方そのものだった。関さんは、口重だと言う人がいるが、それも違う。こういう授業がしたい。授業中に休み時間に、研修生のこういう反応があった、「〇〇さんは、ずいぶん成長したと思う。うーん、思うよ」といった研修生の動向には雄弁だった。

当時から、学ばなくてはと思い続けているが、いまだ、人をあげつらうのを肴に、私は今日も地酒をいただく。残念、ちっとも関さんの境地に到達出来ない。

## 『池袋北口職人大学』編集作業の頃

思い出す話の内容から、この日は、2003年2月のこと、カレッジ7年間の軌跡をまとめた書籍『池袋北口職人大学』の6月発行を前にしたころとわかる。

書籍を読み返して、関さんの授業を思い出す。中学校卒の現場経験を積んでいる子、設計士に合格してくる子、レベルを一緒にするのは難しい。関さんは、「研修生全員が、一定のレベルである必要はない」、「ひとりひとりが自分にあった力学を学んでこそ、本当に使える力学になる」と言い切る。学力を偏重する教育とは相いれない。

構造力学は、数字と記号を使う論理的授業。しかし、面白い授業を組み立てる。教科書はなし、コの字に机を並び替え、顔が見えあう環境に、研修生の職種ごとに違う実体験を引き出し、即興で教材にしてしまう。研修生の関心・集中を逃がさない。研修生が生き生きとしていて、楽しい授業を私もよく教室の後ろから覗かせてもらった。関さんは、「研修生は、仕事をしながら力学と共存している。これを利用し、工夫すれば、力学も身近な課題となる」と言われていた。これを実際に成り立たせるのが、関さんの技。

少し、話がずれるが、冊子「池袋北口職人大学」の編集委員は6人、藤澤好一前学校長を中心に関さんが加わり、影の編集長・榎原正明元事務局次長のもと喧々諤々を繰り返す、最終の編集会議(参考:他の委員は、橋本英夫氏・渡辺顕治氏・松森)、は、朝から深夜におよび、全員ビジネスホテルへ逃げこんでいる。榎原さんが妥協を許さないが、関さんも大いにこだわる。この時ばかりは、恨んだ。

編集を終了、すべてやり上げての夜食兼打ち上げの一杯は美味かった。関さんの対面で大いに喜び語ったことが思い出される。思い返してみれば、行事とその打ち上げ、泊りの会議・研修、見学会ごとにご一緒し、いつも、関さんの輪の中にいた。居心地が良かった。いつしか、この人の笑い顔、頷きを意識して、運営・進行している自分にも気づいていた。楽しい同じ時を過ごしたことに感謝したい。ありがとうございます。

関さんは、「カレッジをつくり、講師となる機会を与えてくれた東京土建に感謝したい」と話していた。真似るなら、私の東京土建への数多くの感謝の中のひとつは、関さんと出会う機会をくれたことだ。

## 濱田酒造「海童」の赤ボトル

芋焼酎の話は、関さんの健康状態を心配し支えられたご家族への失礼となるが、あえて、配慮

無く語れば、あの居酒屋アウルで、もう一度飲みたい。関さんが愛飲した、祝の赤と言われる濱田酒造「海童」の赤ボトルを。言い忘れたことがあるのだ。

約 20 年前には、素直に言えなかった思い。「先生が、教えられているのは、構造力学ではなく、自らの生きざま」、「飲み交わすと、本当にいい気分。人を傷つけない話が清々しくて」と、大真面目に言ってみたい。夕陽の名残を受けたように、頬をそめて照れるであろうか。優しさあふれる関スマイルを見せてくれるか。

息子さんが、カレッジで後を継いで教えられている。滅多にあることではない。関さんだから成した到達だ。今は「たくさんの研修生だけでなく、私たちが、息子さんが先生の影響を受け、育ちました」と伝えたい。自らの良質な生きざまをもって、最良の教えをくれた。関さんに乾杯！ だから、祝いの酒で送りたい。



1998 年 5 月 18 日 若洲海浜公園(?)  
東京建築カレッジの「スポーツ・レクリエーション」企画

# 自分の話をじっくり聞いて よく考えてから返事をしてくれた

教務運営委員、建築大工 片岡 茂樹

今でも本当かどうか分からない。亡くなったことが信じられない。受け入れたくないのか、この文章を書くことも何か嫌な気持ちでしたが、自分の思いを少しだけ書きます。

あなたを想うと浮かんでくる言葉は・・・。「信頼できる素晴らしい右腕がいるおかげなのか、建築カレッジに人生の貴重な時間をささげた人」。「自分には出来ないことを当たり前のように行っている」。「カッコイイ(見た目では分からない)指導者」。「とても良い雰囲気を持っている」。「自分の話をじっくり聞いてくれて、答えはすぐに出さず、何日か後に『片岡さん、あのことはね・・・』と、よく考えてから返事をしてくれる人」。関先生はそんな思いやりにあふれた方でした。

関先生と同じく、今、自分も息子と一緒に仕事をしていますが、先生の息子さんのように良い右腕に育つかどうか、人を育てることは大変なこと、ましてや後を継がせることはとても大変なことだと思います。ただ、私もカレッジの指導員を長くしておりますので、喜びも悲しみも経験しております。関先生のような良い指導者になることなど、自分には無理ですが、自分なりの努力をしていきます。でも、自分は人に指導をするほど偉くないのです。今でも全国の色々な先生に建築大工の施工方法や、規矩術を指導していただいております。いまだに分からないことだらけです。

このような自分ですが、関先生の志を胸に刻み、自分なりの指導をしていきたいと思っております。たくさんの思い出をありがとうございます。



# 自分でやってみなさい！

教務運営委員、第4期生 長野 智雄

「自分でやってみなさい、俺が教えてやるから！」

これは卒業後、僕が関先生に両親の終の住処の構造設計を正式にお願いをしに行った時に返ってきた言葉です。それを聞いて思わず「げっ！」という心の声が口からもれてしまったのを、今でも覚えています。

当時の僕は独立したばかりで、依頼された仕事で忙しいなか、その合間を縫ってこの家の設計作業を進めていました。両親からは「早くしてくれないと住む前に死んじゃう」と言われ急かされていましたが、なんせ両親の家です。多少の我が儘もききますから、設計から施工まですべてを自分の手で行い、出来る限り自分の理想に近い建築を実現したい。そのように考えていた僕は、完全に許容オーバーの状態でした。そのような状況を先生も知っていたので当然僕は「構造計算は君にはできないし、そこは俺がやってあげるから安心しなさい！」と言ってもらえるかなと思っていたら先の発言、先生の方が一枚上手で「俺、構造計算まで自分でやることになるのかあ」と、観念した瞬間でした。

それ以来幾度となく、関先生のご自宅に押し掛けてプライベートレッスンを受け、およそ6年の歳月をかけて、この両親の家は完成しました。

中国に「必要な段階にきた時、師は必ず現れる」という諺がありますが、僕にとって、関先生はまさにこの師の一人にあたります。もしあの時、先生が自分でやりなさいと言ってくれていなかったら、自分自身の手で計算をする経験を与えてくれていなかったら、僕は今でも構造設計の大事な部分を理解できていなかったと思います。

出来ればもう一度お会いし、冗談を交えつつ感謝の気持ちを直接お伝えしたかったです。関先生、本当にありがとうございました。

# 関 昌孝さんの実像

東京建築カレッジ 講師 宮坂 公啓

関 昌孝さんとの出会いは1980年頃になります。鉄骨造の店舗を年に数棟設計する多忙な仕事でしたが、関さんの実力を知りました。関さんは鉄骨加工工場の職人として仕事に入った後、建築構造設計事務所の門をたたき、構造設計技術を習得されたと聞きました。関さんの構造設計は建物架構と主要部材寸法のバランスがよく、細部の納まりに至るまで“現場でたたきあげた腕”をもっていました。

1980年代後半に棟高13m、柱間4m50cmの中規模木造を設計した際には、当時も現在も、建築確認申請では「壁構造による木造設計」を求められますが、関さんは「柱立て架構」の接合部(詳細は拙著(共著):『木の魅力を伝える』133頁)を設計され、建築確認申請をとおすことができました。

引き続いて、「間取り変更可能な木造住宅」という建築主の要望に応じて、方杖(ほおづえ)架構による Timber Frame(詳細は前掲著 147頁)を設計・輸入しましたが、関さんによる構造計算書を米国に送ることで長期保証をとることができました。このような経緯で私は2000年頃から東京建築カレッジの講師(年1回の授業を受け持つ「非常勤講師」)になりましたが、関 昌孝さんの“ほんとうの顔”をご存じない方も多いのではないかと思います。紹介させていただく次第です。

# 温かく包みこむ包容力

東京建築カレッジ 講師 金田 正夫

私が建築カレッジの講師を始めた最初の入学式で関先生が写真撮影を担っていました。自己紹介でカメラマンの旨のお話を優しいまなざしでされていました。どなたがどのような立場の方かも全

くわからない時でしたのでその通りに思い込んでいたのですが、授業の都度控室でお目にかかり生徒の生活ケアを温かい愛情をこめて語っていました。次第に生活指導を担う専任の先生と思い込んでいました。その後、後を継がれた息子さんからお話を伺う中で建築構造設計だけでなく構造計画を大事にする構造家で、その真価を存分に発揮したお仕事をされていることを知りました。私自身のお粗末さ故の認識はさることながら、関先生の生徒を温かく包みこむ包容力と建築への限らない情熱と厳しさを合わせ持つ素晴らしい方であった事を知り、このような人材を失った損失の大きさを感じております。

先生の意志を受け継ぎカレッジが単なる知識の切り売りの場ではなく人間としての成長と真理を限りなく求め学ぶ場としてカレッジが更に成長しますよう微力ながら尽力させていただきます。

# カレッジ生の心をとらえる

## 教育的交友術に敬服

元 東京建築カレッジ 講師 老田 靖雄

関先生とはそれほど長い付き合いではなかったのですがなぜか強烈な印象を覚えている。

当時、私が建政研(建設政策研究所)で建設現場における労働安全の実態について現場経験者として研究していた時、当時の松森事務局長に技術研修センターにきて少し雑巾がけの手伝いをしてくれと言われ、「新宿に行くより池袋のほうが通勤は近いか」程度の気持ちで建築カレッジに行くことになった。その時の出会いが関先生との出会いだった。第1印象はメガネの奥深くぎろりとした目で「君は何者だ」と問いかけるような顔つきで顔を合わせた時、こわそーという一歩引いた感じだったことを覚えている。

暫くして木建(木造建築物の組立て等作業主任者講習)、足場(足場の組立て等作業主任者講習)などの技能講習を担当するようになった。2日間の講習には、カレッジの研修生(学生)も一人、二人と参加してくるようになったが、関先生としてみれば可愛い教え子に老田はどんな技能講習をす

るのか、という気持ちからか、教室の後ろの方いわゆる「聴講」として強面のぎろりとして目で私の講習を点検に来ていた。

私もかなりずーずしい男で全国組織の労組専従もやってきた経験から人前で話すことは慣れている方だったが、さすがに教壇の上で声が上ずった講習になった覚えがある。ある時、2日目の朝だったと記憶しているが、教務室の関先生のデスクの横に、私の講習を受けているカレッジの学生が目を伏せがちに立っていて、関先生が学生に向かって受講態度や居眠りなどのことでいわゆる「研修生にあるまじき態度」としかっていたのです。な一るほど先生は「聴講」が目的ではなく受講生の受講態度を後部座席からうかがっていたのか、と内心安堵したが、実はそれが目的ではなく、深い意味があったのだ。その晩、講習終了後、私のほうから「先生、ちょっと一杯やりましょ」と声をかけるとあのぎろりの目から細めの優しい目になり平和通りの入り口付近あったアウルとい地下にあった飲み屋に入ったが、そこでまたビックリ、店の入り口に「来客者番付表」が張り出され、関先生は常連客の第1位、第2位を争う上位番付(確か大相撲の大関か横綱クラスだった)に名前がありではないか。しかも番付の名前には多くのカレッジ生の名前もあり、先生の教え子たちがたびたび来ていることが一目でわかる店であった。呑んでしばらくすると「居た居た、やっぱり居た」と昼間、先生に怒られていたカレッジ生が数人入ってきて、悪びれもせず「お疲れさんでした」と相席で座ってきた。関先生もニヤリと笑い何事もなく当然来ることを承知していたの如く迎え入れている。おお、これが関流の学生と交流し、学生の心をとられた指導術なんだ、と敬服したが、驚いたのはこのことではなく疲れが影響していることを見抜いていて、その要因をそれとなく聞き出していたことである。学生との僅かな会話の中でそれが学生たちの心をとらえ励ましていたのである。そうした学生や受講生とわずかな一期一会の時間でしかないのに人を大切にする先生の愛情豊かな教育的交友術の一場面であった。

関先生の心配りにほとんど舌を巻いた次第だった。

合掌



卒業生から

## 印象的だった最初の授業

第3期生 佐藤 安紀子

関先生の最初の授業は印象的だった。緊張の中「俺、みんなの顔と名前を覚えるのは苦手なんだよ」と真顔で挨拶されてきた。半分の落胆と安堵の気持ちが過った瞬間、ひとりづつ顔を見ながら名前を呼んで語りかけだしたよね。まんまと先生の思惑にはまってしまい思わず笑ってしまった。先生というより友達に近い感覚で、あっという間に魅力に引き込まれた。

授業は自ら答えが導けるよう、とにかくかみ砕いてわかりやすく教えてくれた。効率よく電卓を使う方法を伝授してもらったこと、卒業制作に向けてご自宅にお邪魔して教授いただいたこと(奥様、その節はお世話になりました)。当時未就学児だった子どもをイベントに連れていくと、まるで孫のように可愛がってくれたこと。

イベント時にはいつも一眼レフカメラを持ち歩いていたよね。木材の圧縮破壊実験を見つめる姿、卒業検定課題に挑む姿、唐招提寺の改修現場で槍鉋を見つめる姿など、カメラを通して生徒に対する情熱を感じるものばかり。

卒業後4年の実務を積んで挑んだ一級建築士試験。構造科目を優位に取組めたのは先生のお陰でしかない。

今夜は先生を思い出しながら心の中で語り合いたい。心からご冥福をお祈りします 献杯

卒業生から

## 「あうる」によく行きましたね。

第5期生 藤枝 奈緒 (旧姓 山川)

他の期も同じ?かどうかわかりませんが、私が居た5期生はほぼ毎週カレッジの授業の終わりに池袋に飲みに行き出すのが定番、と言う学年でした。池袋北口近くの「あうる」では関先生と会うこ

とも多く、最終的に一緒に飲んでいる、ということもしばしばでした。

私はカレッジ卒業後、しばらくして結婚、出産し、その後秋田に移住しました。

ここ数年はコロナ禍と言うことも有り、実家のある東京にまともに帰れていない状況で、カレッジとも疎遠になっておりました。最後にお会いしたのは「匠の祭典」の時でしょうか？子育ても少し落ち着いた数年前から秋田で建築の仕事に復帰し、そんな中、昨年、自宅を新築する機会がありました。設計はもちろん私で、仕事を受けてくれた工務店さんに頼み込み、刻みにも参加させていただきました。

もしまたカレッジに行くことがあったなら、飲みに行く機会があったなら、そんなお話を関先生や他の先生方とできたかも知れません。きっと昔のように嬉しそうに話を聞いてくれたのではないかと思います。

そして、私の名刺入れには関先生がかつてカレッジ生に配った構造力学の公式が書いてある名刺サイズのメモがいつも入っています。日付には 1999.7 とあります。あれからもう24年です。

もう一度お会いしたかったです。ご冥福をお祈り申し上げます

## 仕事での貴重な話に学びました

第11期生 林 優一

私が10代の時にカレッジに入学して、仕事の事など経験豊富な貴重なお話を聞かせて学ばせていただきました。今、他業種ではありますが自分の糧となって仕事をさせていただいています。ご冥福をお祈りします。



# 渋谷支部常任役員からカレッジへ

元 東京建築カレッジ事務局長 梅澤 仁

関先生が、お亡くなりになったというお話しを、お聞きしたとき、一番に思ったのは、「あのいつもニコニコされて、カメラをお持ちになっていた関先生」、「インテリっぽくなく職人氣質を持った、建築カレッジにぴったりの関先生」という思いでした。

私は、研修センター・建築カレッジの2年目に派遣されて、1年余りの短い期間しか在任していません。関先生とのお付き合いは、実質数か月だったのではないかと思えます。

講師になるかの時に、先生は渋谷支部の技術対策の部長をされていたので、支部の主任書記に、了解を求める電話をしたのを、覚えています。その時、「カレッジに専念をするのは困る」と言われつつも了解をもらいました。

その後に、私も異動になり、周年行事などで、お目にかかった際には、いつも、気さくに声をかけてくださり、お元気でご活躍されているお姿を、拝見していました。

東京建築カレッジが、関先生の意味を受け継ぎ、ますますご発展されることを祈念すると同時に、関先生のご冥福をお祈りします。

# カレッジ生への観察力、包容力

元 東京建築カレッジ事務局長 不破 幸司

私が技術研修センター事務局長の任に着いたのはわずか一年数か月間でした。それまで組合の技術対策部門にはほとんど携わってこなかったこともあり、入局当初は右も左もわからず、事務局員の方々や講師の皆様にご教示を乞う日々の連続でした。いま振り返ると何もわからなかったことがかえってご教示くださった皆様のお話が新鮮で感動を持って受け止めることが出来たと思っています。その中でも関先生からは様々なことを教わりました。

一番思い出に残っているのは、カレッジの生徒さんに対する繊細な観察力、優しい包容力です。カレッジ生の多くは、入学からしばらくは授業や環境に慣れず悩み苦しんでいました。中には早々にやめていく生徒もいました。関先生は、そんな彼ら一人一人を分析して、どうしたら授業に前向き

にさせられるか、悩みを吐き出してもらえるかなど、いつも真剣に取り組んでおられました。「人は変わるし成長する」を信念に教務を貫いておられる方だと感銘を受けたことを思い出します。

もう一つは、多くの皆さんがおっしゃることですが、木造建築の「すごさ」を実践的に示された方だと認識しています。カレッジ生の最後の実習である「軸組工法」で建てた実習棟を使い「木造建築の粘り強度」の実験を行う(建物に横方向の圧力を限界まで掛け強度を測定する)場面は圧巻で、日本の伝統的家づくりの強さを目の当たり見ることが出来き、地震国日本の家づくりは伝統的軸組工法が最も相応しいのだと確信を持つことが出来ました。

関先生とはわずかな期間のお付き合いでしたが、私の人生で印象深い先人の一人であることは間違いありません。ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます

# たたきあげの構造設計者

元 東京建築カレッジ事務局長 年森 隆広

関さんとは10歳年下の私、同じ宮崎の出身です。関さんの早すぎる訃報をお聞きし、ただただ驚いています。書記であった私は東京土建渋谷支部の時代に関さんと知り合いました。20数年前、まだ20世紀であった頃です。

当時、渋谷支部には設計者の分会がありましたが、関さんは町場の組合員が多い地域分会で、その役員のお一人でした。現場の組合員と交わす酒の席、温和で豪放な姿でした。

印象に残っているのは、関さんの専門である構造設計に助けられたこと。

当時、渋谷支部での私の担当は仕事対策。受注組織である住宅センターや医療・介護・福祉関係者とのネットワーク(住まいの改善ネットワーク)の活動に励んでいました。

住宅センターは年間に100件程度のリフォームなどを受注していたでしょうか。そのなかで問題のある工事もあり、関さんに持ち込んだのは基礎コンクリートを誤って研ってしまった一件。施主の厳しい抗議に動揺した私でした。

その時、関さんはその現場の図面を正確におこし、研りによる影響と復旧作業の効果について文書で作成し、丁寧な説明と工事の対応を指示されました。住宅センターメンバーの奮闘もあり事なきを得ました。

関さんの専門家としての姿にただただ感謝しました。私や工事関係者の誰に対しても非難をしない、自信を持った誠実な姿に救われました。たたきあげの人だったんですね。

それから10数年後、私は2011年に技術研修センター・カレッジに異動となりました。そこに関さんがおられたことにとっても安堵しました。



関さん、たたきあげの人生をかけて建築カレッジをライフワークにしてくださいました。やりきったのではないのでしょうか。あらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。

# ゲソの買い出しでアメ横へ

元 東京建築カレッジ教務部長 大橋 清次

関先生の訃報に、いつも一緒にいたことを思い出し、悲しく寂しい思いです。

建築カレッジの事は、右も左も全く知らなかった私に、今までの人生経験を活かし、学生と一緒に勉強する気持ちで努めればよいよ、と優しく励ましてくださいました。

いつも、朝 7 時前には先生の姿がありました。あいさつと『今日は授業が無いのに早朝からご出勤ですか』と冗談を言うと『今日も一日良い日になりますよ』の笑顔が印象的でした。

カレッジの最初の行事は、入学式の後に近くの公園で花見です。緊張している生徒に和やかに接し、自己紹介を行い全員の気持ちをつかむことの大切さを教えて頂きました。

先生は林業実習や飯能秩父研修など、いつも生徒と共に活動する姿は学ぶ事ばかりでした。卒業制作では分かりやすく、優しく、時には厳しくアドバイスして頂きました。カレッジ祭など行事での一番の思い出は、玉こんにゃくです。出汁をとるスルメイカは、上野のアメ横商店街でゲソを大量に買い込みました。長時間の煮込みを管理するのは生徒達です。

奈良研修では前年の生徒の研修レポート集を持って、先生と下見に取り組みました。県庁内の文化財保存事務所を訪ね、修復現場を数カ所訪問しました。現場所長にレポート集を渡して生徒の感想を伝え、研修で見てほしい所と学んでほしい事を打合せました。特に現場で社寺建築に携わった方々のお話しは、大変貴重なものでした。

私が定年を迎えるまでの数年間、務める事が出来たのは先生のご指導があったからこそと思っています。ありがとうございました。

# 愛情を感じる関先生の写真

元 東京土建技術研修センター 職員 森田 美也子

私の中の関先生は、人を大切にする人でした。

関先生の机の上は写真の記録でひしめいていました。その一つ一つにカレッジ生の生き様、ドラマが見える気がしました。真剣な表情であったり、笑顔も、疲れて眠ってしまった顔も、目標に向っ

て迷ったりもしながら生き活きしていて眩しく感じていました。

入学した時の期待と不安の入り混じった表情が、卒業する時には2年間大変な思いで頑張ったりやっつけた自信に満ちたたくましい顔に変わっている。私はそれが嬉しく感動しました。

先生の写真は、カレッジ生のそんな表情を写し撮っていて愛情を感じます。

カレッジ祭に息子と娘を連れて行った時には私に役割をくださり仲間に入れていただきました。一人もおいてきぼりにしない。一事務員の私なんかの話を聞いてくださり、結論は私自身が出すようにアドバイスをしてくださいました。

本当にありがとうございました。

先生がそこに居るだけで安心する。

私もそうありたい。

## 関先生のこと

元 東京建築カレッジ事務局長 近藤 初雄

2011年の9月のある日。

執務室に関先生がおられた。「はじめまして」と短く挨拶。たぶん、私の顔は不満そうで、不遜なものだったのだろう。じっと私を眺めておられた。

私は本部の書記局異動の方針について賛意・理解し、支部の書記局、役員に理解を求め、東京土建西多摩支部から本部への異動は2012年度からのつもりで、様々な運動業務を後任者へ引き継ぐ計画を構想しすすめていた。それを仕事半ばで放棄し、8月25日付で移動することに不承不承了解し、暗澹としていた。本部書記長が2011年度中に異動せよと度々求めてくる。そして、技術研修センターの書記局で定年となる事務局次長がおられて、異動先はセンターだと告げられた。そんなことはもっと前に手を打つべきで、職業訓練の実務は何も知らない、事前の準備もない。異動1か月後に事務局次長に任命。そういうことで、本心はすっきりしない日々。

仕事は、「金庫番」で伝票書き・給与等振込、会計入力作業と補助金実務。会館ゴミ対応から建築施工管理技士講座と競技大会・技能五輪・技能検定・講習事務、表彰推薦、宣伝物作成、カレッジの行事、その合間に労組の会議や動員対応などなど目まぐるしく過ぎていく。やり終えない、事務局皆んなの協力でなんとか乗り切る。その実務の中で知った。カレッジ教務の机に座っていらっしやる関先生は、はじめ常駐の給与をもらって勤務していると推測した。しかし、違った。カレッジ生の研修のためには、カリキュラムや研修生の技能育成に必要なときに報酬があろうとなかろうと、学校にやってきて、何かを考えていらっしやる。余裕をもっておられる風格を持ちつつ、カレッジ生の

成長には何をすべきか、どう指導員講師と連携したらいいかに心を砕き、注意を払っておられた。

そして思った。

異動してきた経過はどうであろうと、建設で働く若者の技術技能の育成のため、職責を果たす。私はそのために存在している。目まぐるしく多忙なのは、諸方面に問題点を明らかにし、解決方向を指し示せばいい。支部に残してきた課題は口出ししないで、あとに続く書記局を信じて、求めてくれば助言すればいい。

そうして、関先生がみえたら、「お疲れ様です。今日も一日、がんばりまーす」ということになりました。するとニコッと笑顔になってくれた。「ああ、よかった」と思い、先生に私の仕事を認めてもらえたと喜びました。そんな技術研修センターでの日々でした。関先生、ありがとうございました。

東京土建渋谷支部の仲間から

## 私の出身地、山形から「玉こんにやく」

東京土建渋谷支部 本町南分会 佐藤 カヅコ

関さんの訃報を知り驚きました。関さんが50歳くらいの頃と記憶をしていますが、当時、工務店を営んでいた方の紹介で、東京土建渋谷支部に加入しました。お住まいは、山手通りに面した吉野家さんの裏手に住んでおりました。工務店の付き合いも結構あったようです。そんな関係から本町南分会に所属されたのか、と思います。

当時は、町場の仕事も多い時代でした。お酒の好きな方でしたので、みなさんとすぐ打ち解けたのだ、と思います。当時の私は「女性の会」の会長をやっておりました。「カレッジでお祭りがあるので、何か良い案はないか」と、関さんに問われ、「玉こんにやくを販売したら」と提案いたしました。私の田舎の山形から手作り玉こんにやくを取り寄せました。

今では、ネット販売で簡単に手に入りますが、当時はそう簡単ではなかったです。おいしく煮るには、するめいかのゲソを出汁(だし)に使うのがいい、と聞いて、するめいかをあぶって玉こんにやくと煮ました。味も風味も抜群でした。関さんも以後、玉こんにやくにはまっていたようです。味見したかったな、残念です。

とにかく、何事も熱心で筋の通った方でした。ご冥福をお祈り申し上げます。◆